【中学生区分】

宮城県優秀賞

「差別のない社会に」

気仙沼市立大谷中学校
１年　佐藤　光倫

私が通っていた小学校には、障害がある人が数人いた。その中でも、ある一人は友達に色々文句を言われていた。その子は、みんなとは違う教室で勉強していた。ちょっとしたことで怒ったり泣いたりしてしまう子だった。今思えば、年齢の割には感情のコントロールがうまくできないというのが、その子の抱えている障害だったのかもしれない。級友たちの、その子に対する悪口をずっと聞いていて私はあまりいい気分ではなかった。何度かその悪口を否定したこともあったが、周りの言葉に打ち消された。

私は、自分だけは、他の子と接する時と同じように接しようと思っていた。しかし、一つの出来事で印象が変わってしまった。ある日の休み時間に、校庭でサッカーをして遊んでいると、その子にボールを取られて、返してもらえなかった。友達は「なんでボール取るの。」と強く言ったが、まるで聞いていないようだった。そんなことがあってから、私もあまり好きではなくなってしまった。友達が言う「あいつ何考えてんのか全然わかんねえ」などの悪口にも、同調してしまう自分がいた。そんな自分を今は後悔している。

数週が経ち、その子がどんな人なのか知りたくなり、学校ですれ違う度に、あいさつをするようになった。初めはただ無視されるだけだった。だが少しずつ、小さい声であいさつを返してくれるようになった。どんどん声は大きくなっていった。少しずつ心が打ち解けてきたのかなと思い、友達を何人か連れて思い切って話しかけてみた。

「好きなゲームとかある？」

「妖怪ウォッチ。」

「好きなアニメは？」

「妖怪ウォッチ。」

「妖怪ウォッチで好きなキャラクターは。」

「ジバニャン。」

思った以上に普通に話せてしまった。興味のあるものも、私たちと変わりなかったので、話も続けることができた。

　その後も、彼と話すようになって、思ったことがいくつかある。一つは、すべての行動には、悪気がないということだ。ボールを取った件についても、人が使っているものを横取りしたいとか、私たちに嫌な思いをさせてやろうなどという気持ちはなく、ただ単にボールで遊びたいというだけの気持ちからの行動だったようだ。もう一つは、落ち着いている時は、他の子と言動もあまり変わりがないということだ。好きなゲームや好きなアニメなどもあって、私たちと同じように楽しんでいた。当たり前だったかもしれないけれど、そんなことに気づいてから、印象はもっと良くなっていった。

　私は、そんなことがあってから、悪口を言っていた自分を恥ずかしく思った。まずは相手をよく知ることが大切だと気付かされた。たぶん、私が相手に興味を持って自然に質問したから、彼も自然に会話をしてくれたのだと思う。興味を持って話を聞いてもらうのは私が嬉しいように、彼も嬉しかったのかもしれない。二度と後悔をしないように、まずは自分からどんな人でも少しずつ話しかけてみることを大切にしようと思った。

　相手に対して、先入観を持ってしまわないように、少しでも自分から話しかけていきたい。これから生きていく中、どんな障害を持っている人に会うかわからない。そんな時は、なるべくフラットな気持ちで、その人について興味を持って話したい。